



おさえとおきたい 世界の通貨と長期金利

昔に比べ、世界中の通貨や金利の情報が入りやすくなりました。また多種多様な金融商品が購入しやすくなっていますが、複雑な仕組みのものも多くなっています。今回は、その基本になる通貨と長期金利をじっくり見てみましょう。

外国為替と国債金利の アップ・ダウン

毎日のニュースで耳にする「外国為替」や「長期金利」。外貨も国債も銀行で購入できるようなり、とても身近な存在となっています。いずれも元本保証の金融商品ではありませんが、国や発行元が破たんしない限り、お金が戻らないということはありません。ただし、価格や金利は大きく変動する可能性があります。

外国為替

外貨の代表的なものは、アメリカドル(米ドル)といえるでしょう。この米ドルの価格も大きな波がありました。

円ドル相場を振り返ってみますと、明治30年頃の1ドルは日本円で約2円と言われます。当然日本の貨幣価値が違うので、今の円とは比べられません。当時の公務員の初任給が月8〜9円といわれていますので、かなりの相場の違いといえます。

リーマンショック時の歴史的暴落

	10/21 高値	10/22 低値	10/24 低値
米ドル	102.15	97.2	90.88
ユーロ	133.97	124.66	117.79
豪ドル	70.63	64.83	57.08
英ポンド	172.55	157.93	143.91

単位:円

円高・円安

例) 昨日1ドル100円だったものが、翌日95円になると、1ドルを安く買える(円の価値が高い)ため、「円高」となる。円安はその逆。

購入後にもっといい金利の債券が出たら...

金利1%の債券を購入した後で、金利2%の債券が発行されると、当然2%の債券が人気となります。そうすると1%の債券は売れなくなり、結果債券の価格を下げなくてははいけなくなります。

発行元が破たんしそうになったら...

債券の発行元(国債であれば国)が「もしかしたら破綻するかも」という不安が生じると、ゼロになる前に少しでもお金にしておこう、と「売り」が殺到します。買う人が少なくなりますから、やはり値下げせざるを得なくなります。



昭和24年には、1ドル360円の固定相場となりました。覚えていらっしゃる方も多いでしょうか。その後、昭和48年に変動相場に移行します。このとき1ドル260円まで円高が進みましたが、オイルショックでまた300円前後に戻っています。そして、歴史に残る1985

年のプラザ合意を経て、一気に円高に進み始めます。この日は1ドル235円から1日で約20円も円高になりました。バブルを経て平成に入り、7年には初めて1ドル80円割れを記録しました。その後も円高・円安

を繰り返し、2011年10月には戦後最高値75円32銭を更新しました。この間、短期間での為替の大変動は、なんといってもリーマンショックのときです。円に対する各国通貨が、1日で大きな暴落となりました。

国債の金利

ご存知のように、国債とは国が出す借入書のようなものです。「〇年間、金利〇%で〇円お借りします」ということで、すね。期限まで保有していれば、額面通りにお金が戻ってきます。

しかし、途中で売却する場合は少し事情が異なります。債券(国債や地方債、社債など)は、市場で流通していますが、債券価格はさまざまな理由で変動しているからです。

比較的安心といわれている国債にもさまざまなリスクが伴います。昨年の「ギリシャ危機」が記憶に新しいでしょう。ギリシャの財政が非常に厳しい中で、「債務不履行(お金が戻らない)」の不安から、ギリシャ国債が暴落しました。ギリシャ国債はギリシャ以外の国での保有

為替も金利も過去から見てみると、変動が激しいのがわかります。上がったったり下がったりを繰り返すということは、タイミングを見て運用にも活かせるということですね!

